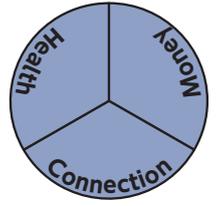


# 2026年のスタートと60年の変化



第一生命経済研究所 代表取締役社長 寺本 秀雄

2026年がスタートする。新たな年は、十二支では午(うま)、十干(じっかん)では丙(ひのえ)、合わせた干支(えと)は60年ぶりの丙午(ひのえうま)である。ご案内のように干支は60年で一周し、還暦のもととなっている。

今から60年前の1966年は、ベトナム戦争が拡大、中国で文化大革命開始という世界情勢の下、日本は前年の昭和40年不況(オリンピック後不況、山一への日銀特融)を脱し、景気は長期成長となる「いざなぎ景気」へと本格的にスタートを切った年である。この年の実質GDP成長率は10.2%、総人口は1億人に迫った。まさに高度成長の最中、成長真っ盛りの社会であった。

一方、丙午はかつて、迷信(この年生まれの女性は気性が激しく夫を不幸にする)により出産を回避する人々が増え、1906年も1966年も出生数が激減した経験がある。統計の明確な1966年のデータでは、出生数は1965年から25.4%減少して136万人になり、合計特殊出生率も前年の2.14から1.58に急低下し、成長真っ盛りの社会に大きなインパクトを与えた。60年後の現在はどうか。2024年の出生数は初めて70万人を下回り68万6000人強となり、合計特殊出生率は1.15と少子化の流れはすさまじい水準となっている。60年前の丙午を吹き飛ばすほどに出生数は低下が明確な状況だ。

マーケットはどうか。相場の格言では、「辰巳天井、午尻下がり」とされるが、60年に一度の丙午では、丙も午も「火の陽」に属し、「火の気が重なり、勢いとエネルギーに満ち、活動的になる年」とされる。このため、「丙午は大相場の始まり」ともいわれ、1966年は1970年まで続くいざなぎ景気下の株価上昇の起点となったが、単年度の日経平均は高値と安値で17%弱も変動する不安定な年であった。2026年も大相場への起点となることを期待したいが、AI相場に湧いてきた近時の超強気相場が大きな調

整なく継続成長するのには確信が持てない。AI実需の勝ち組は定まっておらず、マーケットの動きは不安定な国際情勢も含め、一つのきっかけで大きな調整が生じる余地がある。

現在、日本経済は長きにわたるデフレ状況から脱却し、30年ぶりのインフレ経済となっているが、人口減少は潜在成長率の長期低迷をもたらし、実質GDP成長率は0-1%程度というのが多くの分析である。60年後の丙午、2086年は、人口動態推計によれば、出生中位推計で総人口は74百万人超である。60年後の人口推計はさすがに各種前提で大きく変動しうるが、現在の子供の数からかなり正確な推計となる30年後の2056年の総人口は99.6百万人と初めて1億人を割り、0-14歳が9.5百万人、15-64歳(生産年齢人口)が52.6百万人、65歳以上が37.4百万人とされている。生産年齢人口は30年で20百万人減少する計算だ(以上、国立社会保障・人口問題研究所推計)。

国力低下の流れを断ち切るには、言い古されていることだが、第一に労働力減少を補う劇的インパクトでのAI(フィジカルAI他)活用と外国人材の秩序ある活躍、第二に全要素生産性を大幅に向上させるためのイノベーションや高付加価値産業の強化・拡大が中核となろう。高市政権による「日本成長戦略本部」が掲げる17戦略分野の強化、それに資する資源配分・支援が強く望まれるとともに、担い手の民間企業のリスクテイク意欲が不可欠である。AIの初期開発では遅れを取った日本であるが、0から1を生み出すのが今一つ得意でなくとも、古来、1を磨きこんで10にすることには長けており、今後のAI実践活用での期待もある。

2026年が新たなトレンドの出発点となることを切に希望している。